

情緒的利用可能性

松 島 暢 志

前項「マインド・マインデッドネス」は大人が赤ちゃんを心ある存在だと錯覚することでしたが、それを知ると多くの人はさらに踏み込んで、「錯覚するだけでなく、やはり大人は赤ちゃんの身体や心の状態を正しく読み取って、素早く対応することが大事だ。」と考えるかと思えます。従来、親子関係や保育では、この子どもの状態を正しく見積もる能力、つまり感性(Sensitivity)が、子どもの発達を支える大人の関わりの中で最重要とされてきました。

ではここで、一つの状況を想像して、自分ならどう対応するか考えてください。赤ちゃんに授乳をする場面です。

- ①赤ちゃんが空腹になって泣いたら、母親が泣き声に添って授乳する
- ②赤ちゃんが空腹になりそうな時に、泣いて要求する前に、母親が気づいて授乳する

どちらの対応が赤ちゃんの発達にとってより良いと考えますか。感性の観点からでは、赤ちゃんを泣かせない母親という意味で、②の母親の方が敏感で良いように思えます。しかし②の関わりでは、子どもの欲求を先取りすることにつながり、子どもの自発性(この状況では自らの泣き声でお腹がすいたという欲求を伝える行為)をさまたげることになります。このままでは、自分が行動したことで周囲が反応したという、自力で乗り越えた経験ができず、結果として自己効力感が得られにくいと言えます。

近年の発達心理学では、子どもの欲求を先取りしてしまいかねない感性よりも、子ども自身が望んだことに対して大人は情緒的に反応を

返す、子どもにとって利用可能な存在であればいいという情緒的利用可能性(Emotional Availability)が強調されるようになっていきます。大人はいつも子どもの状態を気にかけて、その後ろを心配してついて回るのではなく、どっしりと構え、子どもが自分を求めてきた時に上手に関われればよいということです。

もちろん情緒的に利用可能であるためには、大人は子どもの状態に敏感である必要があります。しかしそれ以外にも、子どもが自分を必要としない時には、侵襲的にならないということも必要になります。子どもの現在の能力を見極めて、子どもが今取り組んでいる課題を子どもが自分で解決するための最低限の支援をする、少し困難を抱えている時に少しでも後ろから支えてあげようとする、という「支援的なかかわり」が重要です。

感性を重視しすぎないメリットは大人側にもあります。「親や保育者は子どもの状態にいち早く気づかなくてはならない」ということが強調されると、親や保護者にとっては「子どもの気持ちを正しく読み取る完璧な存在でなければならない」というプレッシャーになります。子どもの囲む大人は、完璧な存在ではなく、「子どもが求めてきた時にだけ反応する」という“ほど良い存在”であれば良いのです。

〈引用・参考文献〉

小椋たみ子・遠藤利彦・乙部貴幸『赤ちゃん学で理解する乳児の発達と保育第3巻 言葉・非認知的な心・学ぶ力』, 中央法規, 2019年